

森下正明のプロフィール

森下 正明（もりした・まさあき）

1913年1月27日・1997年2月25日

京都大学名誉教授

理学博士（京都大学 1950年11月4日・学位記番号 372）

生態学者・探検家

個体群生態学の建設者

勲三等旭日中綬章・正四位



世界的な生態学者であり、個体群生態学の発展期に動物個体群生態学を牽引した。同じく京都大学の内田俊郎が室内実験的研究を得意としたのに対して、森下正明は主として統計学を駆使して野外研究のデータを数理解析する手法によっており、この分野で独創的な貢献をした。生態学分野では理論的な研究すすめたが、本来野外で生きものを観察することが大好きなナチュラルリストで、今西錦司、吉良竜夫、梅棹忠夫らと共に卓越した探検家でもあった。

ファールブルの昆虫記に魅せられ昆虫の研究を志された森下正明は、第二次世界大戦中の困難な時代にあっても1939年から1942年にかけて内モンゴル、ポナペ島、そして大興安嶺探検に参加した。この様子は日本経済新聞の『私の履歴書』で今西錦司が1973年1月、梅棹忠夫が1996年1月にそれぞれが執筆し森下正明の活躍を残した。一方、教諭を務めた京都府立鴨沂高等学校で生物研究会の顧問として指導にあたった。そのクラブ員には、日下部有信大谷大学名誉教授、辻英夫京都大学名誉教授、川那部浩哉京都大学名誉教授(滋賀県立琵琶湖博物館名誉学芸員、前館長)などがいた。また九州大学と京都大学で育てた弟子の多くが、昭和末期から平成にかけて日本の動物生態学の指導的な地位につくことになった。日本生態学会全国委員同編集委員・同学会九州地区及び近畿地区会長、個体群生態学会会長を歴任。また京都府文化財専門委員、京都市公害対策審議会委員なども歴任した。九州大学時代以降は統計生態学の理論研究が主たる業績となったこともあり、個体群生態学の日本の生態学者の多くにとっては数理的な解析を得意とする理論派として記憶されているが、本人はアリの自然史的な研究を生涯愛し、晩年公的な地位を退いてからも、日本蟻類研究会を活動の舞台としてアリの研究を続けた。この方面では日本産のアリのいくつかの新種記載に際して、森下正明に敬意を表した献名が行われている。